

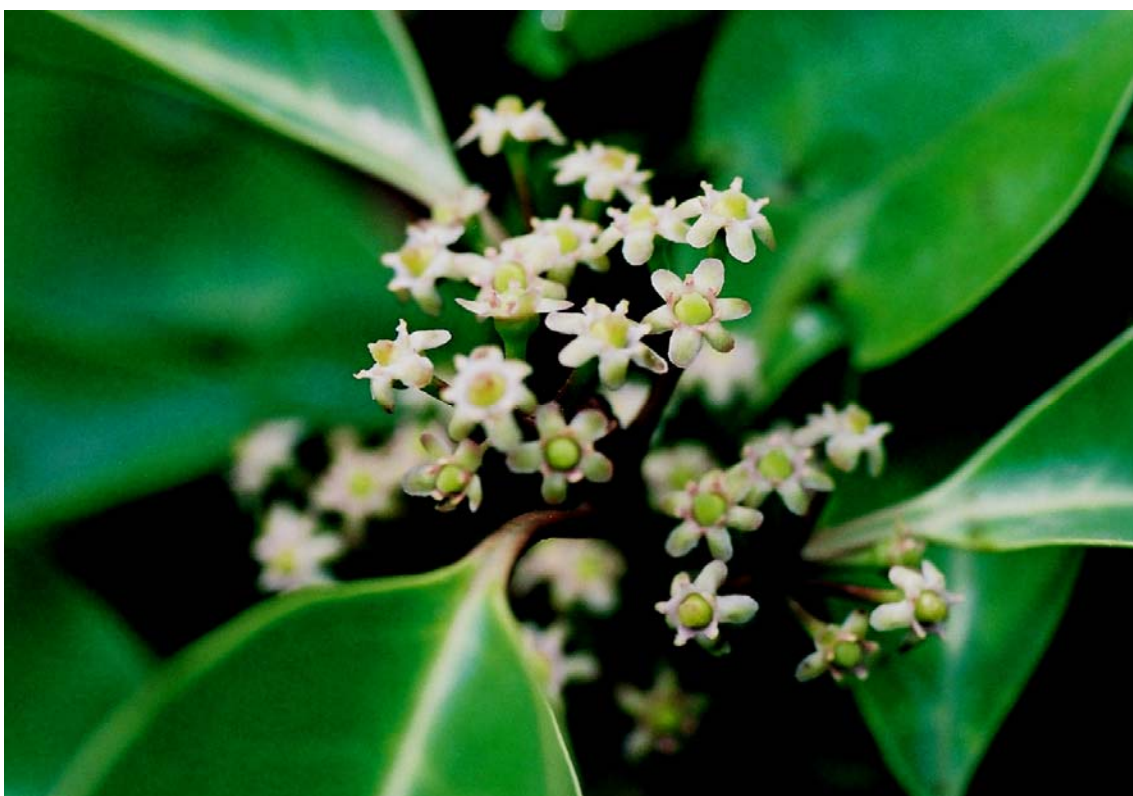
14) クロガネモチとナナメノキとソヨゴ=黒鉄鰐と滑木と冬青

モチノキ科の中には美しい実の生る木が多く、前述のモチやタラヨウの他にも、クロガネモチ、ナナメノキ、ソヨゴなど庭木として植えられているものが多い。しかしもともと暖地性のもで、関東より北の地方ではナナメノキなどはほとんど見ることはできない。この仲間に通じている点は常緑樹であること、革質で光沢のある卵状楕円形の葉を持っていること、5月頃に白もしくは淡い色の花を開き、秋になると赤い果実が美しく実ること、雌雄異株であること、樹皮からは鳥糞をとることができること、材は緻密で印鑑などを作る材料にすることなどである。

クロガネモチは関東以西の山地に生え、高さは10mほど、5月頃葉腋に淡紫色の小花を多数つける。和名の由来は枝が紫黒色を帯びているために名付けられたものといわれており、フクラモチとかイヌモチ、オンジモチなどと呼ぶところもある。学名は『*Ilex rotunda*』で、種小辞は「円形の」という意味で、これは葉の形状によるものである。真紅の種子はこの仲間でもとりわけ美しく、また樹形も整えやすいため、庭木のなかでも主木として植えられることが多い。

ナナメノキは静岡県以西の本州、四国、九州の山地に生え、高さは10mほどになる。葉は10~12cmほどで大きく、6月頃葉腋に集散花序で淡紫色の4弁花を多数つける。和名の由来ははっきりしないが、ナガミノキ「長実の木」がナナミノキとなり、更にこれがナナメノキになったとする説、ナナメは実をたくさんつけるために「七実」の意であるとか、「名のみ」の意味とか諸説がある。別称としてはナナミノキの他にカシノハモチ、イヌフクラ、カシモドキなどと呼ばれている。その名の通りカシノキによく似た葉で、実の美しさはクロガネモチに優るとも劣ることはない。晩秋、関西以西の地では枝がたわむほどに、びっしりと実をつけた大樹をよく見かける。学名は『*Ilex chinensis*』で、中国では『冬青』『凍青』と呼ばれるが、ソヨゴを含めてこの仲間をどれも『冬青』と呼んでいるところが、いかにも大陸的である。鳥糞をとるほか種子や樹皮を強壯剤に用いている。明代の書物である『天工開物』には、この植物の種子からロウソクを作るために、油を採ったとの記述がある。

ソヨゴは関東以西の山地に生え、高さはせいぜい数メートルで、この3種の中では最も小さい。初夏、葉腋に長い柄のある白い小花をつける。和名の由来は厚手の葉が風にそよぐ意といわれているが、むしろ柄の長い球形の果実が風にそよぐ様を言ったように思える。別称はフクラシバ、アオダマ、フクレシバなどさまざまである。学名は『*Ilex pedunculosa*』で、種小辞は「花柄のある」という意味である。この木は関東地方でも庭木としてよく植えられており、栽培も比較的容易であるために人気も高い。材は算盤玉や、櫛の材料、細工ものなどに用いられ、葉からは褐色の染料をとることもできる。しかしソヨゴの良さは何と言っても柄の長い優しげな果実だろう。寒さに強いので関東以北では枝葉をサカキ(07-01-08)の代わりとして用いている。



クロガネモチは赤く照りのある実がびっしりとつくため、庭や公園などにもよく植えられている。しかし関東以北では極めてまれな暖地性の樹木である(埼玉県深谷市)。



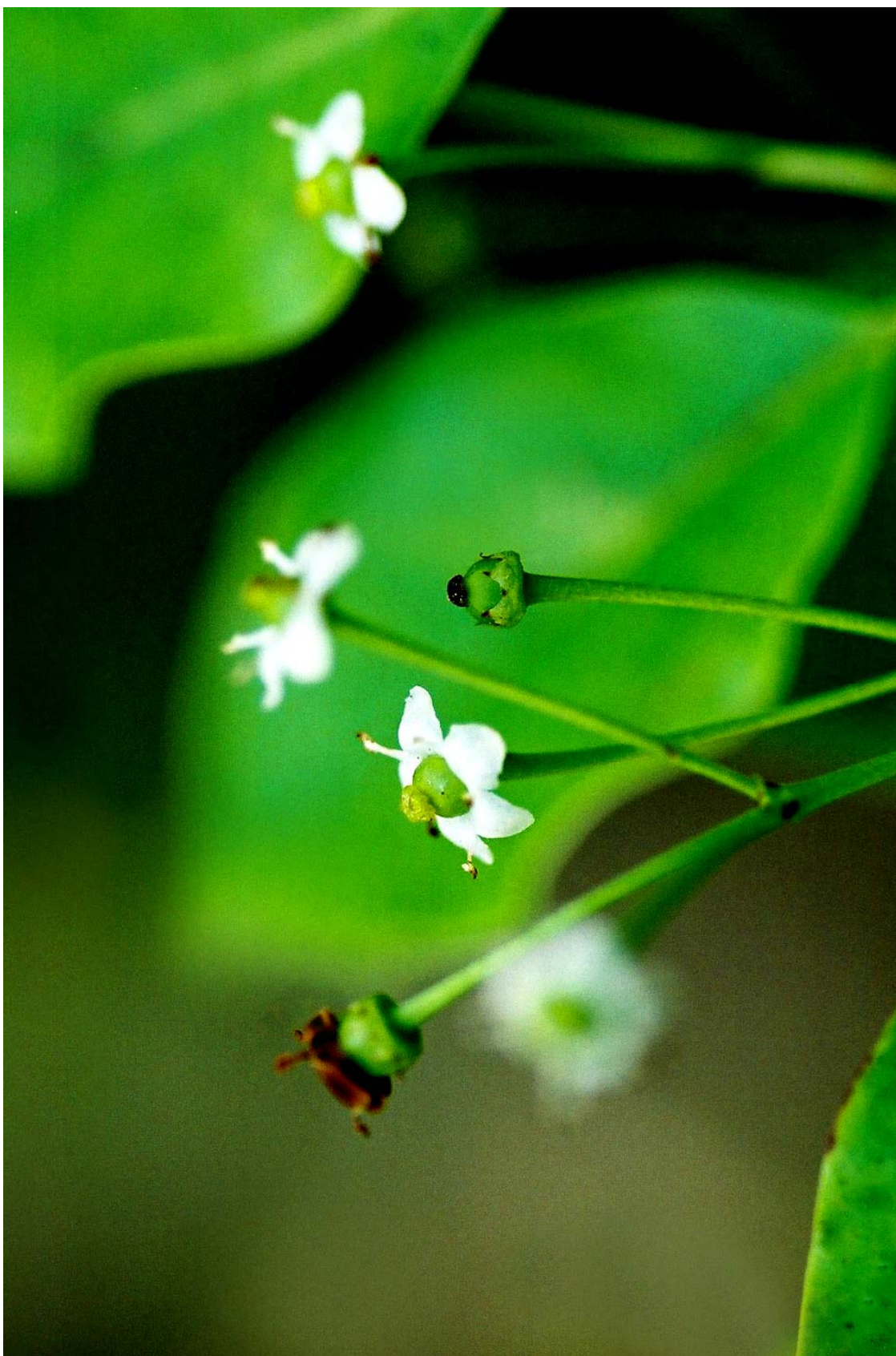
クロガネモチの熟した果実は花よりも美しい(埼玉県深谷市)。



鈴なりになったナナメノキの果実。ナナメノキはクロガネモチよりももっと鈴なりになる。しかし関東ではほとんど見ることが出来ず、伊豆半島よりも西に分布する(京都市東山区)。



ナナメノキの果実。ご覧のように果実はややラグビーボール形である(京都市東山区)。



ソヨゴの花、大宮区にはソヨゴの並木道がある(さいたま市大宮区)。



ソヨゴの果実は柄がいかにも長いため風になびく姿は優しげである。このため愛好家も多く、庭や公園樹木としてすっかり定着している。ソヨゴの果実(埼玉県深谷市)。



大岡山の東京工大下の呑川沿いには、ソヨゴの並木道がある(東京都大田区)。

[目次に戻る](#)